

## ちょうなを使った木の器づくり -ものづくりの楽しさを手道具で感じるワークショップ-

森と木のクリエイター科 木工専攻 根上 拓

### 1. 研究背景

私は今後、暮らしの道具を自分で作る木工体験を提供していきたいと考えている。昨年、授業で弁当箱を作った際に、ちょうな、ノミ、彫刻刀などの手道具を使い、木の質感を肌で感じながら木を掘る感覚が、大変ながらも楽しいものだと実感した。この感覚をもっと多くの人に共有できないかと考え、手道具による木の器作りワークショップの検討を始めた。

製作手段を調べる過程で、臼掘りちょうなという道具を知り、この道具の面白さと作業性を生かす事を考えた。一般には難易度の高い木の器作りワークショップだが、ちょうなを使うことで、独自性のあるプログラムを実現させたいと考えた。

### 2. 研究目的

場所を選ばずに手道具で木を掘る楽しさを体験できる「ちょうな」を用いた木の器作りプログラムを考案する。このプログラムを通して、生活の中で木に親しむ機会を増やし、道具や木製品への関心を高めることを目指す。

### 3. ちょうなの調達

器の製作に向いている手道具は臼掘りちょうなである。まず、現在臼彫りちょうなを扱っている鍛冶屋を調査訪問した。取り扱っている臼彫りちょうなは、おおむねワークショップに適したものだだったが、より器作りの作業に最適化するために改良してもらうことにした。改良の指示をしたのは以下の3点である。

- ① 打撃面の角度調整。初心者にも安全にコントロールしやすいよう、マレット（木槌）で叩く使用方法に合わせて、打撃面の角度を調整した。
- ② 刃先の角度、幅・曲率の調整。
- ③ 首形状の角度、刃先の曲率にバリエーションを設け、作業用途に対応した。



左)首形状のバリエーション 右)刃先の曲率

### 4. 道具の改良

器作りには、加工する材料を動かないように保持するための道具(作業台)が必要になる。この道具は、どこにでも持ち運ぶことができ、同時に器作りに必要な機能性が求められる。この道具は木工道具の「削り馬」をベースに改良を行った。主な改良は下の2点である。

- ① 削り馬で掘りの作業を可能にした。  
→器掘り用アタッチメントを追加
- ② 固定能力の向上  
→材の固定部分にゴムクッションを追加し、材の回転を防止する棒を差し込む穴をあけた。

削り馬の改良の他にも、斧を使う作業に使用する「はつり台」の改良も行った。材料がより安定するよう、アタッチメントを取り付けた。



左)器掘りアタッチメントを取り付けた削り馬  
右)ゴムクッションと回転防止の棒

### 5. ワークショップのモデル検討と実施結果

ワークショップは作業内容と所要時間の異なる「楕円皿」と「角皿」の2つのモデルを考案した。

	楕円皿	角皿
サイズ	230x150x30mm	190x80x20mm
所要時間	約5時間	約1.5時間
使用材	クリ	クリ
特徴	食事も可能なサイズで工程も多い、丸一日掛かる。	手軽。ちょうなの彫跡が意匠として残る。

工程は次の通り。

工程	楕円皿	角皿
①表面：荒掘り	ちょうな	
②表面：仕上げ掘り	スクイノミ	工程無し
③外形：荒取り	ノコギリ	工程無し
④裏面：粗削り	斧	工程無し
⑤裏面：仕上げ削り	南京鉋	
⑥外形：仕上成型、面取り	カービングナイフ	
⑦研磨・塗装の説明	(資料を配布)	

### <実施結果①:楕円皿作り>

楕円皿作りのワークショップを morinos 講座として2回実施した(計6名参加)。全くの木工初心者の参加もあったが、どちらの回も準備した道具を使い、無事にお皿を完成することができた。

道具を使って木を掘る楽しさ、完成の満足感、充実感を感じたという感想が印象的で、楕円皿の特徴であり、狙いでもある体験できる道具の多さや、手間を楽しんで頂けた。

ワークショップ後もアンケートを行い、お皿は生活の中で使用されている事を確認した。また、ワークショップで体験したことが、生活へどのような影響をもたらしたかという問いには、“木(の製品)に目が行き、つい手に取るようになった”、“木がより身近に感じられるようになった”との回答があり、どの参加者も、木やモノづくりに対してポジティブな影響があったと回答した。



左) ちょうなで楕円皿の荒掘り

右) ワークショップの様子

### <実施結果②:角皿作り>

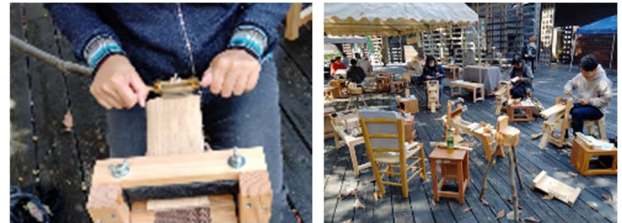
角皿作りのワークショップを翔楓祭の企画として計4回行った(10名参加)。全員が“とても満足した”との感想を寄せ、所要1.5時間で比較的気軽に多くの方に作って頂くことができた。アンケートからは、楕円皿同様に道具を使った作業を楽しんでもらえたのと同時に、より感覚的で直感的な楽しさを感じて頂けた事が分かった。一方で、ちょうなを使いこなさなかった、時間をもっと欲しかったとの声もあり、出来映えを上げたかったものとも理解できた。

### <考察と改善>

ワークショップ参加者の作業の様子から、ちょうなの首の曲がり角は角皿の作業には適さない角度があることがわかった。

また、柔らかく掘れる生木に近い材料を使ったが、ささくれが目立ち、出来栄えに影響した。より乾燥した材を使用することでささくれが減少し、出来栄えが向上したことを確認できたので、2回目の楕円皿ワークショップでは乾燥した材料を使用した。

また、曲面だった皿の裏の形状を平面に変更することで作業時間の短縮が確認できた。



左) 南京鉋で角皿の裏面を成形

右) 角皿作りのワークショップの様子

## 6. ふたつのワークショップの実施から~まとめ~

ワークショップに参加した全ての方から“とても満足”というアンケート結果を頂き、体験の満足度は高いことが伺えた。双方に共通していたのは色々な手道具を使う楽しさを感じてもらえた点である。

角皿作りは短時間である分、感覚的な楽しさを多人数に感じて頂けた。一方、楕円皿は時間が掛かり大変である分、多くの道具を使う達成感や木を掘る面白さを感じて頂けた。更に木製品や手道具によるモノづくりへの関心が高まり、身近になった事が確認できた。

その他にも、楕円皿は手間がかかるため、参加を躊躇していた参加者が、角皿を体験したことで、やはり楕円皿も作りたいとお申込み頂くケースもあった。角皿作りには短時間=導入としての価値を感じた。

また、10月に行った弁当箱展での購入者が参加して、製作の大変さが理解できたという感想を頂き、製品の価値を理解頂く場としての価値も感じた。

## 7. 今後の取り組み

今回行ったような短時間・長時間のプログラムはそれぞれに価値がある為、うまく使い分け、連携させながら色々な“楽しさ”を感じられるワークショップを実施していきたい。そして、適切な工程(道具・治具・加工法)を踏まえ、適切な材料で、出来映え良く、くらしで愛着を持って使用できる物を作って頂く事を目指そうと思う。

また、知識欲への対応、コミュニティ機能なども、価値を高める手段として具体的に考えていきたい。形としては地域や地域の素材と結びつくことが理想であり、例えば、冒頭で触れた弁当箱の塗装にも使用した岐阜県池田町の柿渋を用いた塗装を木工製作と一緒にワークショップ化する等。既に活動されている団体とも連携し、地域と共に木を暮らしにもっと近づけられるよう活動していきたい。